

〔枕草子一〕まつりのころぞいみじうをかしき、○中すこしくもりたる夕つかた、よるなど、去のびたるほと、ぎすの、とほうそらみ、かとおぼゆるまで、たどくしきをき、つけたらん何ご、ちかはせん、

〔枕草子三〕鳥は

郭公は猶さらにいふべきかたなし、いつしか去たり顔にもきこえ、歌に卯花はな橘などにやどりをして、はたかくれたるもねたげなる心ばへなり、五月雨のみじか夜にねざめをして、いかで人よりさきにきかんとまたれて、夜ふかくうちいでたるこゑのらうく、去ふあいぎやうづきたるいみじうこゝろあくがれせんかたなし、みなづきになりぬればをともせずなりぬる、すべていふもおろかなり、よるなくものすべていづれもいづれもめでたし、ちごどものみぞさしもなき、

〔枕草子九〕まつりのかへさいみじうおかし、○中日は出たれど、空は猶うちくもりたるに、いかできかんと、目をさましおきゐてまたる、郭公の、あまたさへあるにやときこゆるまでなきひ、かせば、いみじうめでたしとおもふほどに、鶯の老たる聲にて、かれにせんとおぼしくうちそへたるこそ、にくけれどまたおかし、

〔閑田次筆四〕高野山にほと、ぎすの歸後れたるが、木の節穴などにかゝまり居て、や、さむくなるときは、得動かす、餌ばみももとより得せぬを、雀がつどひて餌をあたへ、來るとしの夏に及ぶまで養ふ、いと不思議なることに、これを雀のほいと、いふ、ほいと、は、乞食のことに、雀のための食客といふことゝぞ、しかるに其邊の山賤ども、夫を探出て、焼鳥などにして食ふは、甚だ悪むべし、其情雀にだにしかずといはんと、和田泰順醫生の話なり、

〔本朝食鑑六〕林禽 蟲喰鳥

蟲喰鳥